

## ウォーラーステインの21世紀観

阪 上 孝

### はじめに

ウォーラーステイン『近代世界システム』は当初、近代世界システム（資本主義世界経済）の誕生から現代までの歴史的展開を対象とする壮大な歴史叙述として構想されていた。すなわち、第1巻：近代世界システムの起源と初期（1450-1640）、第2巻：世界システムの強化の時代（1640-1815）、第3巻：「世界経済」の地球規模への拡大（1815-1917）、第4巻：資本主義の世界経済の一層の強化の時代（1917-現代）という、時間的にも空間的にも壮大な構想である。（ウォーラーステイン1981、16-17ページ）しかし1974年に刊行された第1巻は計画通りだったものの、第2巻（1980年刊）は1750年まで、その9年後の1989年に刊行された第3巻は、フランス革命と産業革命を世界システムの観点から見るとどのように解釈できるかといった興味深い論点などを展開してはいるが、時代的には1740年から1840年代までの変化を論じるとどまった。これだけ壮大な構想であり、執筆期間も長期にわたるとなれば、構想の練り直しや変更が行なわれるのは当然だとも考えられる。それにしても、1840年代以後の世界システムの展開を明らかにするはずの第4巻はいまだに刊行されていないのである。

第3巻刊行後、第4巻の執筆が始まるものと期待されたが、90年代以降、ウォーラーステインは近代世界システムの歴史叙述の続行ではなく、もっぱら現代世界の分析に力を注ぐようになった。近代世界システムの構造的危機は深まり、「分岐点」が迫っているとして、その行方とそこで求められるオルターナティブの提起を可能にする新しい社会科学の構想とに関心を集中したのである。ウォーラーステインは『近代世界システム』第1巻の日本語版への序文で、歴史的システムの研究について、(1) それがいかにして成立したか、(2) それがどのように作動し発展するのか、(3) システムそのものの崩壊と新たなシステムの成立をもたらす事情は何か、の三つの研究課題をあげ、(3) の課題は将来予定している書物で扱う予定だと述べた（ウォーラーステイン1981、xxiii ページ）が、この課題を果たすべき時が来たということであろうか。

この変化は単なる構想の手直しや変更ではなくて、歴史意識の深化によってもたらされた実践的関心の結果だ、と私は思う。近代世界システムの構造的危機やシステムの「分岐点」は、後にみるように、通常の周期的循環の延長上でとらえることのできないものであり、それを捉える新しいパースペクティブが必要である。いいかえれば、《歴史意識》の深化、時代認識の明確化がなければならないということである。ここで《歴史意識》というのは、「時間の推移のなかで、

われわれはどこにいるのか、われわれはどこに向かっているのか、また向かうべきなのか」という問いとそれに対する回答のセットのことである。この問い、とりわけどこに向かうべきかという問いは、実践的な関心呼び起こすであろう。ウォーラステインのこのような歴史意識の変化は1980年代、特にその後半にもたらされた、と思われる。本稿ではこのことを踏まえながら、ウォーラステインの21世紀観を探りたいと思う。しかしそれに先立って、歴史意識にかかわりの深い世界システムの時間相についてみておくことが適切だろう。

## 1. 近代世界システムの時間

近代世界システムについてはすでによく知られているので、次の基本点だけを指摘して、それに特有の時間相の説明に移ることにしよう。すなわち、(1) 近代世界システムは大規模な分業にもとづく世界経済と主権国家間の関係を規制する国家間システムとから成り立っていること、(2) この分業体制は地域間の垂直的分業であり、中核地域—半周辺地域—周辺地域として編成されていること、(3) 「国民経済」はこの分業体制のもとで成立するのであり、したがって分析の単位は「国民経済」ではなく世界経済であること<sup>1)</sup>、(4) 主権国家は自律的存在に見えるけれども、国家間システムのもとで承認を受けることで初めて成立するのであり、したがって世界経済の枠組みに規定された存在であること、である。

近代世界システムの時間相に議論を進めよう。近代世界システムは無限の資本蓄積の優先を本性とする資本主義世界経済であり、それに固有のルールとパターンをもつシステムである。それは特定の時代に特定の場所で誕生した歴史的構築物、具体的に言えば、「長い16世紀」に西ヨーロッパで生まれ、19世紀後半には大きくその領域を拡張して世界を覆うに到り、現代まで持続している史的システムである。500年という長期にわたって持続しているが、それでもやがてはその矛盾のゆえに終末を迎える。つまり誕生と成長・持続、および死滅の三つの時期があるわけだ。システムの持続期間全体は、ブローデルに倣って「長期持続 (longue duree)」あるいは構造的な時間と呼ばれ、これが近代世界システムの基盤的な時間相をなしている。

この長期持続全体のうち、システムの誕生期と終末期はいわば例外的状況であって、この二つの例外的時期に挟まれた「通常の時期」には、上昇と下降をくりかえしつつシステムの持続と成長が遂行される循環的時間が支配する。世界システムの地理的拡大、中核地域—半周辺地域—周辺地域という垂直的分業体制のなかでの各国国民経済の地位の上昇と下降をめぐる競争、周期的

1) 私は1966年に京都大学人文科学研究所の助手に採用され、最初に参加した共同研究のテーマは「世界資本主義の研究」であった。その成果は1970年に河野健二・飯沼二郎編『世界資本主義の歴史構造』(岩波書店)として刊行されたが、その序文には「現在のわれわれは、何よりもまず世界資本主義の実在性を確認する立場に立って、いわゆる「国民経済」をその二次的、派生的で、浮動的な構築物としてとらえることが必要である」と述べられている。ウォーラステインに先立って、彼の世界システムと共通の問題設定が表明されているといえよう。『近代世界システム』第1巻の刊行(1974)後、間もないころ、この共同研究を編者ととも推進された角山栄氏が、「ウォーラステインに先を越された」といささか残念そうに漏らされたことを憶えている。

な経済循環とヘゲモニーの移動が、その具体的様相である。地理的拡大は、経済的余剰を獲得するために世界システムの外部世界を周辺地域に編入することにほかならず、中核諸国が経済的困難を克服するための最良の手段だった。逆から言えば、近代世界システムがその領域を拡大するにつれて、編入すべき外部世界は稀少になり、余剰の獲得と資本蓄積は困難になる。この点で世界システム論は、世界の資本主義化がもたらす非資本主義圏の消滅によって資本主義は崩壊すると主張するローザ・ルクセンブルクの主張と近い関係にあると見ることができよう。

ウォーラーステインが注目する周期的な循環運動は、コンドラチェフ波動とヘゲモニーの移動の運動である。コンドラチェフ波動は、50-60年周期の経済循環で賃金の上昇、有効需要の増大、物価の上昇、生産力の拡大など、経済活動の活発化で特徴づけられる上昇局面=A局面と、賃金引き下げ、失業、有効需要の減少、物価下落など、経済活動の沈滞を特色とする停滞局面=B局面の交替と反復で成り立っている。停滞局面は経済的苦難の時期だが、過剰になった生産を解消し、古臭くなった産業分野を整理して新しい主導産業を中心に経済の再編が行なわれる過程である。この再編過程の後に、新しいレベルで再びA局面が到来する。このようにして資本主義世界経済はラセン状の成長を遂げるのである。

ヘゲモニーは、グラシムが政治的・文化的な指導性という意味で用いた語だが、ウォーラーステインはこの語を、圧倒的な経済的優位に立ち、それを背景に他の諸国にルールを課する力という意味で用いた。世界経済は世界帝国と違って、政治的統一を欠いており、その代わりに国家間システムという仕組みを据えた。国家間システムは主権国家の間の関係(条約、同盟や勢力均衡など)にほかならないが、その関係の基礎となるルールは最も強力な国家によって課される。ヘゲモニーとはこのルールを課する力にほかならない。ヘゲモニーの移動はコンドラチェフ波動よりも長い周期(100-150年)で移動する。歴史的には、オランダのヘゲモニー掌握(1620年頃-1670年頃)ののち、英仏間の長いヘゲモニー争いを経てウィーン会議(1815年)から大不況(1873年頃)まで、イギリスのヘゲモニーが続く。その後、米独のヘゲモニー争いを制したアメリカが1945年以後ヘゲモニーを掌握する。これがウォーラーステインの描くヘゲモニーの移動の概括的な歴史である<sup>2)</sup>。ヘゲモニーの移動は通常、コンドラチェフ波動のB局面と一致して起こり、数十年にわたる長いヘゲモニー争いを経て実現する。

地理的拡大とこの二つの周期的運動を通じて、近代世界システムは資本蓄積の困難を解消し、中期的に平衡状態を回復する。これらは資本主義世界経済がシステムとして保有する、平衡回復の仕組みなのである。しかしもとより資本主義世界経済の矛盾は根本的に解決されたわけではなく、反対に、累積して一層深刻なものになる。これが世界システムの終焉をもたらす長期趨勢である。資本主義世界経済はその成功によって自らの墓穴を掘るのだ、というのがウォーラーステインの資本主義世界経済観である。

時間相についてもう一つつけ加えておけば、世界史の各時点はこれらの時間相の複合によって

2) ヘゲモニーの移動の歴史については、ウォーラーステイン1991、第4章で詳しく述べられている。

規定されている、つまり各時点における状況は複合状況 (conjoncture) なのである<sup>3)</sup>。複合状況の概念は歴史を、単線的な進歩の歴史としてではない仕方を読み解くために、とりわけシステムの転移の局面を考察するために重要な概念である。

## 2. 歴史意識の深まり

ウォーラステインの歴史意識ないし時代意識は80年代に大きく深化したと述べたが、その第一の契機は、1977年に散逸構造理論でノーベル化学賞を受賞したプリゴジヌの理論との出会いである。ウォーラステインは「1981年にある研究集会でプリゴジヌが話すのを聞いたとき、私が長いあいだ曖昧な仕方を感じていたことをこれほど明晰に述べる人の話を聞いて驚嘆した」(Wallerstein 2004A, p. 102) と回想している。プリゴジヌから受けたもっとも大きな刺激は「分岐 (bifurcation)」という考え方である。私にはプリゴジヌの学説について論じる力はないが、『混沌からの秩序』とこの本に付せられたトフラーの解説 (「まえがき」) を手掛かりに分岐の概念について考えよう。

ウォーラステインはプリゴジヌについてこう述べている。「彼は、平衡過程は物理的現実においてきわめて特殊で異例なケースであり、このことは古典物理学自体の心臓部、熱力学において証明されていると、きわめて明瞭に語り始めた。」(Wallerstein 2004A, p. 102) ニュートン力学とそれをもとにした機械論は、閉じた系 (システム) とそのもとで成立する線形の因果関係を対象としてきた。しかしプリゴジヌによれば、閉じた系は物理的世界のごく一部にすぎず、実在の一部にしかあてはまらない。あらゆる系は絶えず「ゆらいでいる」部分系を含んでいる。この《ゆらぎ》、または《ゆらぎ》の組み合わせによって既存の組織が破壊される「分岐点」が到来する。トフラーは「原始状態の種族」を例にとり、「平衡」状態にある系と「平衡に近い」系と「平衡から遠く離れた」系の違いを取り上げて、「分岐」について説明している。この種族の出生率と死亡率が等しいなら、人口は安定したままである。適当な食料やその他の資源があれば、この種族は「生態学的平衡状態にある局所系の一部をなす。」出生率を多少増加させてもこの事態にはほとんど影響を及ぼさず、おそらく「平衡に近い」状態に移るだろうが、大きな変化は起きないだろう。しかし「もし出生率が急増したなら、系は平衡から遠く離れた状態に押しやられる。この状態では系は奇妙なふるまいをする。外部からの影響に対して敏感になる。小さな入力巨大な驚くべき効果を生む。」(プリゴジヌ1987, 8ページ) こうして現存の系を平衡状態から遠く離れた条件へと導き、系の構造を脅かすにいたった場合、系は「分岐点」に近づいてゆく。

3) 複合状況はもともとブローデルの用語だが、アルチュセールは、ブローデルとは異なる文脈で、政治的実践の観点からこの語に重要な意義を与えた。アルチュセールは書いている。「経済による最終審級における決定に服しつつ、支配因は様々なレベル間を移動するが、その移動を扱う強い意味における理論を我々はもっていない。我々は状況の変異を説明する理論をもっていない。」(市田2010, 25ページより引用)

この分岐点では、現存する系の「次の状態をあらかじめ決めることは本来的に不可能である。」(同、19ページ)つまり分岐点においては、解は二つあり、そのどちらが選択されるかを前もって見通すことはできない。「偶然が、その先を決めかねている系を、新しい発展の道へと突き落すのである。そしていったんある道が(多くの道のなかから)選択されると、次の分岐点に到達するまで、決定論の支配が再開される。」(同、19ページ)分岐点において見出されるのは、決定論的過程ではなく確率論的過程だ、とプリゴジヌはいう。(プリゴジヌ1997、59ページ)こうして系全体の歴史を見ると、「一連の分岐が相次いで出現する。」<sup>4)</sup>(同、59ページ)プリゴジヌは『確実性の終焉』の最後で「新しい科学」の目指すものについて述べている。「今や創発しつつあるのは、決定論的世界と偶然性だけからなる恣意的世界という二つの人間疎外的な描像の間の「中間的」記述である。世界は法則に完全に支配されているものではないし、世界は全くの偶然に支配されている訳でもない。物理法則は新しい形の理解可能性をもたらし、それは還元不可能な確率論的方程式によって表現されるのである。微視的レベルか巨視的レベルかを問わず、新しい自然法則は、不安定性と結びつけられることによって事象の可能性を扱うのであり、事象を決定論的法則からの演繹可能で予言可能な帰結へと還元させてしまうことはない。」(同、159ページ)このようにして偶然性は真面目に論じるに値しないもの、すべてを統べる法則に対する無知のゆえに登場するものという否定的な存在としてではなく、過程全体のなかで正当な位置を占める存在として理解されることになる<sup>5)</sup>。

先にふれたように、ウォーラステインは早くから近代世界システムの崩壊と新しいシステムの成立を視野に入れていた(ウォーラステイン1981、xxiii ページ)。けれどもこの問題を資本主義の崩壊と社会主義の到来の必然性といった既成の問題設定とは違う仕方考えるうえで、分岐の概念は決定的な役割を果たした。ウォーラステインは分岐の概念を採用することによって、世界システムの平衡回復の機能が保持されていて、循環的律動により平衡状態に回帰する「通常の発展の時期」と、システムが平衡状態から遠く離れてしまい、分岐点を迎える「構造的危機の時期」とを区別し、現代が後者の時期に近づいていることができると考えたのである。実際、テレンス・ホブキンスと共同で編集した『転移する時代』では、近代世界システムを構成する六つのベクトルを分析することにより、1990年代以後、世界システムは分岐点を迎えつつあることを示そうとしている。近代世界システムは、コンドラチェフ波動の循環的律動とヘゲモニーの移

4) プリゴジヌも取り上げているダーウィンの進化論は、「分岐による進化」論だった。ダーウィンは「自然選択」による生物進化を唱えたが、その特色は進化の特定の方向が前もって定まっておらず、ある「種」の生物個体にランダムに起こった変異が、その「種」の生きる環境により有利であった場合、「自然選択」によって生き残り、個体数を増加させることになり、その結果「種の進化」が起きるとされる。

5) 西洋の近代思想史は必然性を主題とし、偶然性の問題をほとんど無視してきた。しかし偶然性は思想史として考察するに値する興味深い問題であり、アルチュセールは晩年の著作『出会いの唯物論の地下水脈』でエピクロス以来の「出会いの唯物論」の歴史的展開を論じている。(市田2010、第4章を参照されたい。)1970-80年代はさまざまな領域で《偶然性の復権》が見られた、思想史的に興味深い時期である。

動を繰り返しつつ、次第に長期趨勢としては平衡状態から遠く離れて分岐点に近づいていること、そして分岐点においては、構造的決定は力を失い、したがって歴史的選択が未来を左右すること、しかしかなる選択肢が選ばれるかは前もって予測できないし、通常の過程と異なり、小さな入力が必要な結果を生むから、いくつかの道筋を示すことはできても、未来は本来的に予測しえないことが、ここでの議論の要点である。

時代意識の深化をもたらした第二の契機は「1968年の世界革命」である。この年、パリの五月革命が燃え上がり、世界各地でベトナム反戦運動が空前の高揚を見せた。「社会主義圏」でもチェコスロヴァキアの「プラハの春」と呼ばれる革命を先頭に社会変革の動きが東欧を襲ったし、中国では文化大革命が巻き起こった。社会変革を求める闘争が世界各地で同時多発的に生じたのである。ウォーラステインは1988年秋に発表した論文「1968年—世界システムにおける革命」で、1968年に世界各地で激発した反体制運動を「典型的な革命、単一の革命」と呼び、「世界システムの内容と本質にかかわる革命」(ウォーラステイン1991A, 114ページ)だと評価した。

しかしここで注意しておく必要があるのは、68年世界革命の歴史的意義が主張され始めるのは80年代後半になってからだということである<sup>6)</sup>。たしかに、1984年に刊行された『世界経済の政治学 国家・運動・文明』は近代世界システムの変革を目指す運動を「反システム運動」として総括し、かなり多くのページ数を使って分析している。しかしここでは「68年世界革命」という言葉は使われていないし、世界各地の運動もコンドラチェフ波動の下降局面であるB局面への転換が惹き起こした「社会的不安」のあらわれと見るにとどまっているのである。(ウォーラステイン1991B, 174ページ)<sup>7)</sup>さらに、この書物では、1967-73年に、アメリカの圧倒的な経済的優位が崩れ、その結果アメリカのヘゲモニーが後退しつつあることも述べられている。つまり二つの中期的循環が屈曲点を迎えていることは指摘されているが、それは「通常の循環」の一コマであり、1990年代にはA局面の回帰が見られるだろう、とされている。ヘゲモニーの面では、アメリカのヘゲモニーの後退に続いて、「後継をめぐる競争者」として日本と西欧という二つの勢力が登場し、米日欧の間の不安定な競争関係が続くと考えられている。しかしいずれも「通常の過程」の延長上で考えられていて、近代世界システムが分岐点に向かいつつあるという認識は見られないのである。

ウォーラステインは先にふれた1988年秋の論文で、「68年革命」の意義を六つの命題と、さらに六つの設問と回答という形で要約している。その主な内容は68年革命を世界システムの本質と内容にかかわる革命と捉えたうえで、(1) 68年の異議申し立てが、世界システムにおけるアメ

6) 山下範久によれば、1968年にはウォーラステインが勤務していたコロンビア大学でも新体育館の建設や防衛分析研究所との協力問題をめぐって学生運動が激化して建物の占拠が続き、ウォーラステインは教授団人権委員会の委員長として事態の民主的・平和的解決のために活動したということである。これらの運動が世界で同時多発的に起こったことが、世界システム規模で考えねばならないという確信を深める契機になったことは確かだろう。

7) この評価が含まれる論文(同書中の「10 世界経済の将来」)の発表は1980年である。

リカのヘゲモニーとそれを承認したソ連とに反対するものであること、(2)「既成左翼」に反対する反システム運動であること、(3) 社会改革の基本戦略に関する論争が今後20年間の政治論争の主流になること、に以前の反システム運動と異なる特色を見出している。ウォーラーステインはこのように1968年革命の内容を分析したうえで、その真の重要性は未来に関して問題提起した点にあると述べ、近代世界システムにとって代わるべき世界システムに向けて、一貫した新戦略の検討が不可欠であることを強調して、この論文を締めくくっている。

このようにウォーラーステインの68年革命論は一貫して世界システムの観点—ホーリスティックな観点—からなされた議論だった。68年革命は、各地で闘われた闘争のそれぞれの要求や展開に即してではなくて、もっぱら、近代世界システムの一つの帰結であると同時にその未来にかかわる出来事として考察されたのである。革命を闘った人々、革命を生きた人たちは、おそらく、彼の外在的でホーリスティックな観点には大きな違和感を覚えるにちがいない。ウォーラーステインが与えた68年革命の評価の個々の内容には同意したとしても、である。たしかに、世界システムの観点から見ると、先に(1)で述べたことからして、1989年の「社会主義圏」の崩壊も68年革命の延長上でとらえることが可能になる。いいかえれば、ソ連の崩壊は、多くの論者が言うように自由主義の勝利なのではなく、むしろその危機の深化を示す出来事だ、というのである。こうして1968年と1989年は結びつけられるのである。

ウォーラーステインは、世界システムの観点から、68年革命が世界システムに与えた文化的衝撃を重視する。すなわち、68年世界革命は、資本主義世界経済の正統性を保証する「地政文化」への異議申し立てであった。地政文化とは、ウォーラーステインの定義によれば、世界システムの内部で正統なものとして広く受け入れられている規範と言説の様式のことであり、近代世界システムのそれは自由主義である。自由、自由主義という言葉は、きわめて多義的な言葉だが、ウォーラーステインは『アフター・リベラリズム』で歴史社会的分析によって自由主義を規定しようと試みた。

ウォーラーステインの考えでは、自由主義はフランス革命後にフランス革命が生み出した二つの変化—近代世界システムの展開にとって重要な変化に対処するべく生まれた。一つは、政治においては変化が常態であること、もう一つは、人民が主権者だということである。保守主義はこの二つの変化に真っ向から反対した。政治にとって重要なことは安定であり、変化は異常事態である、人民=主権者などんでもない、というのである。それに対して、急進主義は政治的変化をもっと加速すること、人民主権を徹底させることを求めた。この対立のなかで、自由主義はフランス革命のもたらした二つの変化を受け入れつつ無害化するイデオロギーとして登場した。その主張はこうである。変化は常態だし、制度がより合理的なものに変わってゆくことは望ましいことであり、必要でもある。しかし変化を急ぎすぎれば、逆効果を生む。だから適切な速度で変化を進めることが重要なのだ。人民主権については、合理的改革の観点からすれば、無知な大衆が主権を行使することは避けねばならない。1791年憲法は、直接税の支払額を基準に、選挙権を有する能動市民と主権の恩恵には浴するが選挙権をもたない受動市民とに区別したのである。

その後次第に選挙権は拡大されてゆくが、自由主義の基本的な立場は、「有権者になりたければ、金持ちになりたまえ」というギゾーの言葉がよく表している。このような選挙権の制限によってエリートによる支配と人民主権の折り合いをつけることが、自由主義の基本戦略であった。

1848年革命は民族運動と社会主義運動という反システム運動が舞台の正面に登場した、最初の世界革命であった。革命はすぐさま厳しい弾圧を受けて敗北したが、保守主義も急進主義（社会主義）も自由主義も、それぞれこの革命の経験に学んで、変身を遂げた。保守主義は、頑固に伝統を守り、急進派には弾圧で臨むことは有効でなく、彼らに対する時宜を得た譲歩が最も賢明な方策であることを悟った。

社会主義の主流は、従来の都市暴動や単発の武装蜂起では勝利しえないことを認めて路線を変更した。国家権力をいかなる方法で奪取するかをめぐって対立が長く続いたけれども、まず国家権力を獲得し、次いでその国家の力で変革を実現するという路線である。ウォーラーステインはこの路線を二段階革命路線と呼んでいる。（ウォーラーステイン1997, 152ページ）この路線はその後長い間採用され続け、第二次大戦後、共産党は地球上の三分の一を支配に収め、ヨーロッパではかなりの国々でかなりの期間、社会民主主義が政権を掌握した。こうして国家権力を掌握するという革命の第一段階は達成されたけれども、第二段階の方は、改革が部分的に成し遂げられはしたものの、ほとんど手付かずだった。国家関係の面でも、ソ連がアメリカの「敵にして友」であることが示すように、アメリカのヘゲモニーに正面切って敵対するケースは多くなかった。世界システムは「社会主義圏」の存在にもかかわらず、正常に作動し続けた。もっとはっきり言えば、世界システムはソ連を支柱として作動し続けたのである。「1945年から1970年の間に、それらの運動〔反システム運動〕が、あれほど迅速に成功を遂げたことは、驚きであると言ってよかろう。……その過程で示されてきたことは、史的システムとしての資本主義が——生産様式として、世界システムとして、文明として——極めて巧妙であり、柔軟であり、丈夫であるということである。」（ウォーラーステイン2001, 61ページ）

自由主義は、選挙権の漸進的拡大とその知的基盤を強化する教育機会の拡大、「危険な階級」の不満を和らげ、急進的な運動を防止するために、失業や疾病から保護する社会保険制度や労働組合の承認、国家の社会的凝集力を強めるためのナショナリズムの強調を基本戦略として採用した。自由主義は「今はよくない状態だが、合理的改革を積み重ねれば事態はよくなる」という希望ないし幻想を振りまき、大衆を丸め込んだ。この「希望というアヘンは……特に、世界の反システム運動の指導者の口に入り、彼らは、希望という前途を示して、動員を行った。」（ウォーラーステイン2001, 138ページ）こうして自由主義は反システム運動をも世界システムに取り込むことに成功した。このようにして1968年世界革命まで、自由主義は世界システムの地政文化として、国家の正統性を支え、国家間システムを規制するうえで最も重要な支柱の役割を果たしたのだった。

68年革命は自由主義を「詐欺的約束である」として告発し、「世界システムを規定するイデオロギーとしての地位から追い払ってしまった。」（ウォーラーステイン1997, 236-237ページ）



ウォーラーステインの考えでは、これは近代世界システムにとって、B局面の深刻化やヘゲモニーの弱体化よりもはるかに重大な事態だった。地政文化の動揺は世界システムの正統性を大きく損なうからである。そうだとすれば、世界システムの分岐点を考える場合にも、地政文化の問題が重視されることになるだろう。

### 3. 転移の時代

1967-73年はコンドラチェフ波動のA局面からB局面への転換期であり、アメリカのヘゲモニーが衰退の局面に入ったことを示す年代であった。それだけでなく、68年の世界革命は近代世界システムの正統性を大きく揺るがせるにいたった。こうした状況を受けて、ウォーラーステインは所長を務める「フェルナン・ブローデル研究センター」で1992年からテレンス・ホプキンスとともに、「転移の時代」に関する共同研究を組織した。その成果は『転移する時代—世界システムの軌道』として1996年に刊行された。この書物では、近代世界システムを構成する六つのベクトルを取り上げて、1945年から1990年までの世界システムの軌跡を分析し、1990年から2025年に辿ると想定される事態について推測を行った<sup>8)</sup>。六つのベクトルというのは、(1) 国家間システム、(2) 世界生産の構造、(3) 世界労働力の構造、(4) 世界人間福祉の諸パターン、(5) 国家の凝集力、(6) 知の構造である。それぞれの項目を紹介することは不可能なので、特に重要と思われるベクトルのみを見ておこう。

まず1945-90年の期間について見よう。

1945年はコンドラチェフ波動のA局面の始まりであり、中核諸国では自動車や電化製品などの主導産業を中心に工業生産の拡大が続いた。社会主義ブロックにおいても、また他の諸国においても集中的工業化政策がとられた。世界工業生産の飛躍的拡大は一次産品の拡大を促し、その結果、周辺諸国の収入も潤うことになり、「栄光の三十年」が世界規模で実現した。「繁栄の一般化、生活水準の上昇、雇用の総体的安定」という意味での栄光の三十年（ウォーラーステイン1996、271ページ）は1967-73年に終わり、石油ショック（1973-74）を契機に下降局面が強まった。生産は減速し、人口増加という要因も加わって一人あたりの生産は減少し、失業率が上昇した。中核諸国の経済が不振になると、南から北への労働力移動は規制されたが、雇用者は従来以上に低賃金労働者を必要としたから、非合法の移民が増加した。（同、275ページ）こうして生産や労働力においては、1967-73年を境にA局面からB局面に移行したと見ることができる。

経済面でのアメリカの圧倒的優位が揺らぐとともに、アメリカのヘゲモニーも弱まり、国家間システムも空洞化してゆく。国家間システムはヘゲモニー国家が他の諸国にルールを課する力を有しているかぎりでは機能することができるのであり、ヘゲモニーが動揺すれば国家間システムは機能不全に陥る。そのことを表しているのは、イラン革命（1979年）である。「ホメイニとその

8) 1990—2025/2050がどんな時代であるかについての推測は、『アフター・リベラリズム』、『新しい学』、『ユートピスティクス』などでも論じられている。

支持者たちは五百年の歴史を持つ国家間外交の慣行を全く無視し、……カーター氏は砂漠でヘリコプターを失ったし、レーガン氏もアメリカ人質の解放に奔走せねばならなかった。」(同、281ページ) さらに「敵にして友である」ソ連の崩壊が追い打ちをかけた。ソ連の崩壊はアメリカの勝利であるよりも国家関係の支柱を失うことであり、「アメリカの突出した優位に対する致命的な打撃であると考えるのが、より妥当であろう」(同、282ページ) とウォーラステインは言う。

もっと重要なことは、「国家権力に対する広範で重大な批判が現れた」ことであり、国家の凝集力が著しく低下したことである。これは、1970-80年代は「コンドラチェフの B 局面であるとか、覇権大国の凋落期の始まりであるとかするだけでは容易に説明のつかない点」(同、284ページ) である。国家は近代世界システムの平衡状態を維持するうえでカギになるシステムだからである。

以上の1945-1990年の分析を踏まえて、1990-2025年の動向予測するとすれば、現実的な可能性は二つしかない、とウォーラステインは言う。一つの可能性は、世界経済がこのまま命脈を保ってほぼ同様に機能し続けるという可能性である。この場合にはコンドラチェフ波動は A 局面に転じ、ヘゲモニーも再構築されることになろう。第二の可能性は、1970年代から顕著になってきた事態が「通常の循環」よりも量的にも質的にも重大なもので、「システムの危機、すなわち分岐がやがて現実化する」(ウォーラステイン1999A, 294ページ) ことである。

1973年以來の B 局面のもとで、利益を上げられない企業の世界的「淘汰」が進み、新しい主導産業で技術革新が進むことによって、2000年前後には経済の上昇期＝ A 局面が到来するだろう。このようにコンドラチェフ波動のような「あるレベルでは、世界システムの諸パターンはそのまま持続すると予測される。」(ウォーラステイン1999A, 297ページ)

しかし先にあげた六つのベクトルを検討すると、「通常の過程」が継続するとはとても考えられない。第二の可能性の方がずっと高いのである。国家間システムについては、ソ連の崩壊とともに、冷戦に根拠を置く機構(例えば NATO) はすべて古ぼけてしまい、世界システムの地政学の上ではほとんど無効になっている。核拡散はすでに現実となっており、国家間システムを統御するヘゲモニー国家が消滅した結果、「小さい」戦争が抑制されず増加してゆく可能性や「南」の複数の勢力が連合して「北」に対して軍事的に挑戦する可能性も否定できない。こうして国家間システムの動揺は深まり続けるだろう。労働力の面では世界の脱農村化が進み、利潤の大きな源泉である低賃金労働のプールが減少する。これは資本主義世界経済の本性である資本蓄積を脅かすであろう。福祉についていえば、多くの民衆の福祉への要求は高まり、さらに次の A 局面で「南」から「北」への労働力移動が増加し、貧しい移民労働者が増えれば福祉の費用はさらに大きくなるだろう。国家財政の危機は深まり、福祉水準の切り下げが問題になるだろう。このことは福祉の問題だけにはとどまらない。「世界福祉の後退、とりわけ世界福祉が向上するという信念の後退は、国家の社会的凝集力に重大な打撃を与える。そうした打撃にとどまらず、既成の反システム運動に対する信頼のきわめて大幅な後退、ひいては合理的改革主義の実効性に

対する信頼の崩壊という、深刻な結果につながる。それは単なる循環的な浮沈ではなく、それ以上の意味を持つ。」(ウォーラーステイン1999A, 307ページ) こうして楽観主義は消え去り、「強度の不確実感、いつ消えるとも知れない恐怖が瀰漫する」(同, 308ページ) ことになる。世界システムの正統性が揺らぐのである。

その上に、環境汚染の問題が加わる。生産と人口の増加がもたらす資源消費と廃棄物の増加によって、生態環境の悪化は臨界点に近づきつつある。それを食い止めるには多大の費用がかかるが、それをだれが負担するかが問題になる。これまで企業は費用の外部化によってコストを引き下げて利益を上げてきた(多くの場合、納税者が負担してきたということだ)が、その限界が迫っているのである。「世界は、環境破壊による破滅か、費用の内部化の強制か、という選択に直面しているのである。しかし費用の内部化の強制は、資本蓄積の能力にとって、深刻な脅威になる。」(ウォーラーステイン1999, 310ページ)

これらを総合して、今や近代世界システムは構造内の循環ではなくて、構造的危機、分岐点に直面している、といわなければならない。かりに A 局面を迎えて経済が拡大しても、長期趨勢の点では好転は望めず、かなり長期にわたる(25~50年とウォーラーステインは推測している)システムの移行の時代を経験するだろう。それは不安と反乱と激しい闘争が続く「暗黒の時代」(ウォーラーステイン1999B)になるであろう。

## む す び

このようにウォーラーステインが描く近未来像は暗い。しかも移行の時代の先に到来するものは本質的に不確実で、見通せない。しかしウォーラーステインは、不確実性のなかに希望を見出す。不確実であるからこそ、未来は創発性に開かれているのだ。ウォーラーステインはこの創発性を現実のものとするべく、分岐点での歴史的選択を主題とし、その可能性を論じ探査する新しい知のあり方を提起する。ウォーラーステインはそれを「ユートピスティクス」と名付け、「ユートピアの可能性、その限界、その可能性を実現する際の制約の分析」(ウォーラーステイン2001, 372ページ)だと定義している。

この新しい知の基礎は不確実性と実質合理性である。「もしわれわれが不確実性をわれわれの知の体系の礎石と見なすならば、おそらくわれわれは、本質的に近似的であり、明らかに決定論的ではないが、われわれ全員が生きている現在において、歴史的な選択肢に焦点を合わせるのに役立つような現実についての理解を構築することができるだろう。」(Wallerstein 2004, p. 3)そしてこの知が選択肢を問題にするからには、マックス・ヴェーバーの言う目的合理性や形式合理性にとどまることはできず、実質合理性<sup>9)</sup>を目指さなければならない、とされる。具体的にいえ

9) 実質合理性は形式合理性に対して用いられるマックス・ヴェーバーの用語で、形式合理性が計算可能性を意味するのに対して、実質合理性には一定の価値基準の設定が前提され、経済行為がその基準に照らして行われる度合いを意味している。その点で、実質合理性は価値合理性との関連が強いといえよ

ば、大筋において平等で、大筋において民主的だという価値基準を満たすようなシステムをオルターナティブとして提起するということである。それは多くの未知の要素や偶然を含む困難な道になるだろう。さらにそうしたオルターナティブが採用されるか否か、その結果がどうなるかも不確実である。

こういったからといって、ウォラーステインの未来観がまったくベシミスティックだというわけではない。不確実性と創発性とは背中合わせにくっついた双生児であり、不確実性は自由な創造の担保だとウォラーステインは考える。困難に満ちた「転移の時代」は新しいシステムの創出に開かれた時代でもある。ウォラーステインの21世紀観は、短期的にはベシミスティックだが、中長期的には、オブティミスティックだといえよう。

#### 参考文献

- ウェーバー 富永健一訳「経済行為の社会学的基礎範疇」（尾高邦雄編『ウェーバー』『世界の名著 50』中央公論社）
- ウォラーステイン 川北稔訳『近代世界システムーⅠ』岩波書店，1981.
- ウォラーステイン 田中治男他訳『世界経済の政治学』同文館，1984.
- ウォラーステイン 川北稔訳『史的システムとしての資本主義』岩波書店，1985.
- ウォラーステイン 丸山勝訳『ポストアメリカ』藤原書店，1991.
- ウォラーステイン 松岡利通訳『アフター・リベラリズム』藤原書店，1997.
- ウォラーステイン 丸山勝訳『転移する時代』藤原書店，1999A.
- ウォラーステイン 松岡利通訳『ユートピスティクス』藤原書店，1999B.
- ウォラーステイン 山下範久訳『新しい学』藤原書店，2001.
- ブリゴジヌ 伏見康治他訳『混沌からの秩序』みすず書房，1987.
- ブリゴジヌ 我孫子誠也他訳『確実性の終焉』みすず書房，1997.
- 市田良彦『アルチュセール ある連結の哲学』平凡社，2010.
- 川北稔 川北稔編『ウォラーステイン』講談社，2001.
- Wallerstein, *The Uncertainties of Knowledge*, Philadelphia, 2004A.
- Wallerstein, *World-Systems analysis*, Durham, 2004B.

---

ㄨ。 (ウェーバー1975, 330-331ページ)